

資料

食事場面における幼児と母親の相互交渉

外山紀子* 無藤隆**

MOTHER-TODDLER INTERACTION IN A MEAL TIME

Noriko TOYAMA AND Takashi MUTO

The purpose of this study was to investigate the mother-toddler interaction in a meal time at home. Subjects were 17 one and two year-old-toddlers and their mothers. The interactions during lunch time at home were twice videotaped a week apart. The results were as follows: (1) Mothers picked up more topics not relevant to eating itself as information to children who were older and more able to eat by themselves than the younger and less able children; also to older siblings than younger ones. (2) When children were eating, mothers would talk more about 'taste' and 'tool' and uttered more questions and praises to their children than when children would not be eating. (3) Only when the physiological function of the dining was satisfied, would the mothers spontaneously hold a conversation. (4) When children would not eat, mothers would try to clearly make the distinction between meal time and non-meal time. It was found in own studies that mothers seemed to try to incorporate the physiological activity of 'eating' into a culturally determined script of 'dining'.

Key words: cultural learning, 'dining' script, mother-toddler interaction, meal time.

問題

従来、食事に関する研究というと、栄養・食品・調理・食生活などの家政学的研究が中心となってきた。心理学的な関心から始められた研究もわずかながらあるが、そこには、例えば食べ物の嗜好に影響を与える要因として、食べ物が与えられる文脈に焦点を当てた研究 (Birch, 1987; Birch, Zimmerman & Hind, 1980)、小・中学生とその母親を対象に食行動の質問紙調査を行い、それと母子関係との関連性を問題にした研究 (天野, 1986; 1987) などがある。食事を含めたしつけ一般に関する問題については、その国際比較を行っているもの (村山, 1988)、拒食症との関連では、社会的文脈の分析からこの病気の文化的な現象たる側面を浮き彫りにし

ているもの (Brumberg, 1988)、あるいは、食生活の実態調査によって、摂食異常と家族関係との関連性を示しているもの (水野ら, 1988) などがある。

これらの先行研究に対して、本研究は3つの意義をもつ。第1に、生態学的妥当性の高い食事場面を捉え、家庭での食事において、幼児とその母親が日常的にどのようなやり取りをしているかを浮き彫りにする。食事に関する従来の研究は、質問紙調査が主であるが、本研究では観察という手段をとることによって、食事場面自体のもつ特質、すなわち食事が生理的状态と深く関わりつつも、親子の交流またしつけの場でもあることが、そこでのやり取りにどのような影響を与えているかを具体的に明らかにする。質問紙調査は、被調査者の信念は浮き彫りにできても、実際の行動がどのようなものかを捉えるには至らない。そこで、本研究は観察という手段をとった。

第2に、本研究は母子のやり取りを、属する文化に

* 東京工業大学 (Tokyo Institute of Technology)

** お茶の水女子大学 (Ochanomizu University)

熟達した指導的他者(母親)と未熟な者(子ども)とのやり取りの過程と見なすことによって、食事に付随した文化的意味の習得過程を浮き彫りにしようとする。子どもが自立した食べ手になるまで、母親は、子どもが何を食べたらいいか、どの様な道具を使ったらいいか、どの程度話をしてもよいかといった様々なルールを決めている(Valsiner, 1987)。母親は、子どもの能力に応じて環境を調整し、両者を媒介している(Wertch, 1980; Valsiner, 1989)ともいえる。本研究は、食事場面で幼児が何を学んでいるかを、それを導く母親がどの様に働きかけているかという観点から明らかにしようとする。

第3に、食事のような日常的に行われる活動の手続に関する知識はスクリプトと呼ばれ、3-4歳児において既に獲得されていることが知られている(Nelson, 1986; Nelson and Gruendel, 1986)が、その獲得過程は未だ明らかになってはいない。本研究は、従来のスクリプト研究では取り上げられてこなかった1-2歳児に焦点を当てることによって、食事スクリプトの獲得過程に次のような見解を示す。すなわち、食事は「食べる→食欲が満足される」という生理的行動を基調としている。「いただきます→ごちそうさま」までの食事スクリプトは、その生理的行動にのったものである。とすれば、食事スクリプトの発生の基礎は、生理的行動としての「食べる」を、文化的あるいは社会的な活動の手続に組み入れるところにある。

本研究では、母親の発話、母親の発話と子どもの食行動との関連、子どもの発話、そして、母親の発話と子どもの発話の意味的随伴性の分析を通じて、以下の問題を明らかにすることを目的とする。

問題1: 幼児は、基本的食事習慣の習得途上にある。そこで、子どもがどれだけ自立した食べ手であるかによって、母親の発話内容は異なってくると考えられる。食事場面での母親の働きかけに制約を与えるものとして、まず、子どもの年齢・食事技能の習得程度があげられる。より年齢が高く、より基本的食事習慣が身につけている子どもに対してほど、母親は目今の摂食とは直接に関係のない話題を取り上げるだろう。この点は、母親の発話分析を通じて明らかにする。

問題2: 1-2歳の幼児は、食べることをそれ自体に問題を持っていることが多い。何とんでも食事は、食べるという生理的行動に基づくので、それによって母親の働きかけは制約を受けているだろう。母親は、食欲がない、食事に集中しないとといった子どもの生理的状态にあわせて、それをうまく調整しながら、食事をさせる。子どもが食べていれば、生理的欲求を満足さ

せるという食事の第1目的が達成されたことになるので、母親は食事に付随したより高次の事項(マナーを守って食べる)に注意を向けるだろう。この点は、母親の発話と子どもの食行動との関連を分析することによって明らかにする。

問題3: 「食べる→食欲が満足される」という生理的行動と、「開始(いただきます)→文化的に認められた方法で食べる→終了(ごちそうさま)」という文化的あるいは社会的手続が一致して食事スクリプトが形成されると考えると、その橋渡し役を引き受けているのが、その文化に熟達した指導的他者(母親)である。母親は、生理的行動としての「食べる」を食事スクリプトへと変換させる手助けをしているだろう。この点は、母親の発話と子どもの食行動との関連を分析することによって示唆を得る。

問題4: 母親を、属する文化に熟達した指導的他者であり、ヴィゴツキーのいわゆる発達の最近接領域を提示する者とみなし、子どもをそれに未熟な学習者とみなすと、そこでのやり取りは文化的学習の過程として捉えられる。母親は、子どもが自立した文化的実践者になるまでの過程を導く役割を負っている。では、その過程はいかなるものか。母親の発話分析、およびそれと子どもの発話との意味的随伴性の分析を行うことによって示唆を得る。

方 法

(1) 被観察者: 1歳児とその母親10組、2歳児とその母親7組。被観察児の属性はTABLE 1の通りである。ただし、年齢および性、きょうだいの有無、きょうだいの年齢および性について、統制が不十分である。従って、例えば、きょうだいのモデリング効果などが、母子の発話・行動に影響を与えている可能性は排除できていない。

(2) 観 察: 各家庭を訪問し、1週間の間隔を置いて2回、昼食時をビデオで観察する。平均観察時間は、TABLE 1の通りである。

(3) 分析方法: 母子の全発話とおよその行動を転記する。母親と子どもの発話を単位に区切り、その内容に従って、以下のようにカテゴリー化する。更に、母親の発話については、発話形式について、以下のようなカテゴリー化を行う。子どもの発話については、頻度が少ないため、内容の分析にとどめた。

【発話単位】

①開始: 参加者の一人が発話を開始したとき。②終了: (a)他の参加者が発話する。(b)発話終了時点から5

TABLE 1 被観察児の属性

1-2歳児					きょうだい				
月齢	性	観察時間	習得率	Z得点	年齢	性	習得率	Z得点	
(m.)		(m.)	(%)		(y.)		(%)		
A	13	F	25:33	8.80	-1.28	3	M	94.60	1.15
B	13	F	47:47	4.80	-1.39	3	M	96.30	1.19
C	14	M	12:12	11.00	-1.21				
D	15	F	18:31	34.20	-0.56				
E	16	M	21:31	0.00	-1.52				
F	16	F	17:45	16.80	-1.05				
G	18	M	15:32	14.30	-1.12				
H	21	F	32:38	36.60	-0.49				
I	22	M	27:27	15.10	-1.10	3	M	89.60	1.00
J	22	F	15:37	39.60	-0.41				
O	25	F	21:31	57.10	0.09				
P	27	F	11:47	58.80	0.13				
Q	27	F	21:58	41.70	-0.35	6	F	100.00	1.30
R	29	F	16:32	58.80	0.13	7	M	92.40	1.08
S	33	F	36:33	69.30	0.43	6	M	100.00	1.30
T	35	F	33:43	90.70	1.03	4	M	97.20	1.22
U	35	F	14:58	68.70	0.41				

秒以上経過したとき。

【発話カテゴリー】

<発話内容>

①食べる：(a)摂食「さあ、食べてちょうだい」(b)食欲「あー、お腹いっぱいね」②味：(c)味覚「おいしい？おいしいねえ」(d)食品（食品の属性に触れるもの）「カリフラワーは、白いでしょ」③マナー：(e)そしゃく「お口がからっぽになったら入れなさい」(f)食べ方「ほら、自分で食べなさい」(g)姿勢「そんな風によっかからないで、背中を伸ばして食べなさい」(h)こぼす「あー、落っこっちゃった」④道具：(i)道具「お皿に手をそえてね」⑤けじめ：(j)けじめ「いただきます」「車で遊ぶのはお食事の後にしてね」⑥会話：(k)共食「お兄ちゃん、これ欲しいっていうから分けてあげて」(l)話をする（目の摂食とは直接に関係のない話題）「あさって、プール行こうね」⑦その他

母親の発話分析、子どもの発話分析では、第2水準カテゴリーの頻度が少ないので、第1水準のカテゴリーを用い、母親の発話と子どもの発話の意味的随伴性の分析では、細かな発話の意味を問題とするため、第2水準のカテゴリーを用いる。

<発話形式>

①促し「さあ、食べてね」②質問「これ、おいしい

かな？」③情報提供「これは、甘いです」④賞賛「あー、えらい！えらい！」⑤禁止「お手々はダメ！」⑥母親の感想・意見「これ、おいしいと思うんだけどな」⑦代弁「僕、もうお腹いっぱいだしゅ」⑧その他

二人の評定者が独立に評定し、不一致の点は協議して評定した。評定者間の一致については、発話内容カテゴリーについて、0.87、発話形式カテゴリーについて、0.89（いずれもCohenの κ ）の一致率が得られた。

きょうだいが参加している場合には、母親の発話は対象児（1-2歳）に対するものと、きょうだいに対するものに分類される。各カテゴリーについて、各観察回毎の全発話数を分母とした百分率を算出する。一人一人のデータには、2回の平均値をあてる。なお、U児についてのみ、1回の観察に留まった。

【被観察者の分類】

①年齢ときょうだいの参加—1-2歳児を対象にする。年齢（1歳と2歳）と、観察場面にきょうだいが参加しているか、いないかの基準で4群に分類する。

②きょうだい間の比較—きょうだいが参加している被観察者のみを対象にする。同じ母親でも、きょうだいの上の子どもと下の子どもに対する発話が、どの様に異なるかを問題とする。

③習得率—1-2歳児ときょうだいの全てを対象とする。子どもが食事習慣においてどれだけ自立しているかを以下のようにして数値化する。子どもが、自分で、食べ物をそれにふさわしい道具を使って口に入れた回数を、食べ物を口に入れた総回数（母親によって入れてもらう・子どもが自分で食べ物にふさわしくない道具を使って（ex. ご飯を手で食べる）入れる等を含めた全ての回数）で除し、百分率を算出する。その数値をZ得点に変換する。Z得点が-1.0以下をI段階、-1.0~0.0までをII段階、0.0~1.0までをIII段階、1.0以上をIV段階とする。結果は、TABLE 1の通り。

I段階は、母親によって口にいられてもらうことが殆ど、自分の手で口に運ぶことはあってもこぼしてしまう段階。II段階は、スプーンやフォークを手を持つものの、自分の口にうまく食物を運び入れられるのは、半分ほどで、母親によって口にいられてもらうことの方が多い段階。III段階は、スプーンやフォークの扱いにもだいぶ慣れ、半分以上、自分で道具を使って口にいられるが、しかし、手で入れる、あるいは母親に口にいられてもらうこともしばしば見受けられる段階。IV段階は、殆ど、自分で道具を使って食物を口まで運ぶことができる段階である。

結果と考察

(1) 年齢・基本的食事習慣の習得程度による発話

まず、母親の発話内容、発話形式を分析し、ついで、子どもの発話内容の分析を行う。

【母親の発話について】

<発話内容>

① 年齢ときょうだいの参加

結果はTABLE 2に示す。年齢(2)×きょうだいの参加(2)の分散分析を行った結果、「会話」について、年齢の主効果：1歳児<2歳児 (F(1,13)=11.49, p<0.01), および年齢×きょうだいの交互作用 (F(1,13)=4.88, p<0.05) が認められた。母親は1歳児よりも2歳児に対して、より多く「会話」を行う。

TABLE 2 母親の発話内容
年齢ときょうだいの参加・不参加による分類

	食べる	味	マナー	道具	けじめ	**会話	その他	合計
<1歳児>								
参加 (N=3)	55.0	14.0	26.2	6.8	9.0	4.3	26.3	141.7
	38.8	9.9	18.5	4.8	6.4	3.1	18.6	100.0
不参加 (N=7)	51.3	21.7	14.6	10.1	8.4	3.2	8.9	118.3
	43.4	18.4	12.3	8.6	7.1	2.7	7.5	100.0
<2歳児>								
参加 (N=4)	30.4	11.6	7.5	5.9	7.9	7.0	10.8	81.0
	37.5	14.4	9.3	7.3	9.7	8.6	13.3	100.0
不参加 (N=3)	15.0	6.7	7.2	3.0	3.8	8.7	3.5	47.8
	31.4	14.0	15.0	6.3	8.0	18.1	7.2	100.0

上欄は実数 下欄は百分率
** p<0.01 * p<0.05

② きょうだい間の比較

結果はTABLE 3に示す。t検定を行った結果、「マナー」(t=2.47, p<0.05: 下>上)と「会話」(t=3.12, p<0.05: 上>下)において有意な差が認められた。母親は下の子どもに対してより「マナー」を、上の子どもに対して、より「会話」を多く行う。

③ 習得率による比較

結果はTABLE 4に示す。分散分析を行った結果、「会話」について、習得率の主効果 (F(3,20)=6.98, p<0.05: I, II<IV), 「味」について習得率の傾向 (F(3,20)=2.59, p<0.10: II<IV) が認められた。母親は、自分で食物にふさわしい道具を使って食べられる子どもに対して、より多く「会話」を行い、かつ「味」に関する発話を行う傾向がある。

TABLE 3 母親の発話内容
きょうだい間の比較

	食べる	味	**マナー	道具	けじめ	**会話	その他	合計
下の子ども (N=7)	40.9	12.6	15.5	6.3	8.4	5.9	17.4	107.0
	38.0	13.0	13.7	6.3	9.0	5.7	14.2	100.0
上の子ども (N=7)	16.4	3.4	4.8	3.2	3.1	11.1	0.6	42.8
	38.2	8.0	11.1	7.5	7.3	25.9	2.0	100.0

上欄は実数 下欄は百分率
** p<0.01 * p<0.05

TABLE 4 母親の発話内容
習得率による比較

習得率	食べる	味	*マナー	道具	けじめ	**会話	その他	全合計
I段階 (N=7)	54.1	16.4	20.7	7.1	8.5	3.6	16.9	127.4
	42.5	12.8	16.3	5.6	6.7	2.9	13.3	100.0
II段階 (N=4)	40.2	21.7	10.4	11.0	8.0	2.2	7.6	101.1
	39.7	21.5	10.3	10.9	7.9	2.2	7.5	100.0
III段階 (N=5)	22.3	9.1	7.7	2.5	6.4	5.9	7.6	61.5
	36.3	14.8	12.5	4.1	10.4	9.5	12.4	100.0
IV段階 (N=8)	18.8	4.4	2.9	6.1	2.0	14.4	0.6	49.1
	38.3	9.0	5.8	12.3	4.0	29.2	1.3	100.0

上欄は実数 下欄は百分率
** p<0.01 * p<0.05 +p<0.10

以上、3つの分析より、母親は、1歳児よりは2歳児に対して、きょうだいの下の子どもよりは上の子どもに対して、習得率が低い子どもよりは高い子どもに対して、より多く「会話」を行い、コミュニケーションの場としての食事を実践していることが示された。これによって、食事場面での母親の働きかけは、子どもの年齢・基本的食事習慣の自立の程度によって制約を受けているだろうとする問題1は、とりあえず支持された。1-2歳の幼児は、ごく基本的な食事の手続を習得する途上にあり、子どもが実際にそれをどの程度習得し、母親からどれだけ自立して食べられるかによって、母親の発話は制約されているのである。

<発話形式>

① 年齢ときょうだいの参加

結果は、TABLE 5に示す。年齢(2)×きょうだいの参加(2)の分散分析を行った結果、「情報提供」について年齢の主効果：1歳児<2歳児 (F(1,16)=19.14, p<0.001), 「代弁」について年齢の主効果：2歳児<1歳児 (F(1,16)=4.83, p<0.05)が認められた。母親は、年齢の低

い子どもより年齢の高い子どもに対して、情報を提供する形式で発話し、逆に、年齢の低い子どもに対して、代弁という形式で発話する。

TABLE 5 母親の発話形式
年齢ときょうだいの参加・不参加による分類

	促し	質問	情報	賞賛	禁止	母親	代弁	その他	合計
<1歳児>									
参加 (N=3)	53.2	28.6	20.2	9.2	2.7	5.2	11.1	11.4	141.7
	37.6	20.2	14.3	6.5	1.9	3.7	7.90	8.00	100.0
不参加 (N=7)	42.1	14.7	15.9	6.8	19.6	7.7	5.4	6.2	118.3
	35.6	12.4	13.4	5.7	16.5	6.5	4.6	5.3	100.0
<2歳児>									
参加 (N=4)	39.6	6.4	21.0	2.5	5.2	4.5	0.1	1.7	81.0
	48.9	7.9	25.9	3.1	6.4	5.5	0.2	2.14	100.0
不参加 (N=3)	16.5	7.7	10.1	3.2	2.6	1.4	1.3	5.0	47.8
	34.5	16.2	21.1	6.8	5.5	2.8	2.7	10.4	100.0

上欄は実数 下欄は百分率
** p<0.01 * p<0.05

② きょうだい間の比較

結果は、TABLE 6 に示す。t 検定を行った結果、「情報提供」(t=2.36, p<0.05:上>下)について有意な差が、「母親」(t=1.94, p<0.10, 下>上)について有意な傾向が認められた。母親は、上の子どもに対してより情報を提供する形式で働きかけ、下の子どもに対して、より母親自身の感想や意見を述べる形式で働きかける傾向がある。

TABLE 6 母親の発話形式きょうだい間の比較

	促し	質問	情報	賞賛	禁止	母親	代弁	その他	合計
下の子ども (N=7)	41.1	15.4	19.7	6.0	2.9	4.2	3.2	14.6	107.0
	38.4	14.4	18.4	5.6	2.7	3.9	3.0	13.6	100.0
上の子ども (N=7)	14.6	5.5	14.0	2.4	1.1	0.8	1.9	2.6	42.8
	34.2	12.8	32.6	5.7	2.5	1.8	4.4	6.0	100.0

** p<0.01 * p<0.05 +p<0.10

③ 習得率による比較

結果は、TABLE 7 に示す。分散分析を行ったところ、「情報提供」について、習得率の主効果 (F(3,23)=7.36, p<0.005) が認められた。母親は、基本的食事習慣が自立している子どもに対して、より情報を提供する形式で発話する。

TABLE 7 母親の発話形式
習得率による比較

	習得率	促し	質問	情報	賞賛	禁止	母親	代弁	その他	合計
I 段階 (N=7)	46.1	20.5	18.2	8.2	3.0	5.9	7.5	17.9	127.4	
	36.2	16.1	14.3	6.4	2.4	4.7	5.9	14.0	100.0	
II 段階 (N=4)	35.9	21.8	13.3	8.3	2.2	3.8	7.9	7.9	101.1	
	35.5	21.5	13.1	8.2	2.2	3.8	7.9	7.9	100.0	
III 段階 (N=5)	27.5	7.0	16.4	2.2	2.4	2.5	0.9	2.7	61.5	
	44.7	11.3	26.7	3.6	3.9	4.0	1.4	4.4	100.0	
IV 段階 (N=8)	16.8	6.5	15.3	2.8	1.1	1.0	1.9	3.7	49.1	
	34.2	13.3	31.1	5.7	2.2	2.0	3.8	7.6	100.0	

上欄は実数 下欄は百分率
** p<0.01 * p<0.05 +p<0.1

母親は、言語能力がまだ十分でない1歳児に対して、2歳児に対するより多く「代弁」形式で「発話」する。換言すれば、子どもは、十分にしゃべれるようになる以前から、母親の口を借りて、食べる→「僕、おいしいでしゅ」といったことを発話しているといえる。また、情報提供という形式での発話が、1歳児よりは2歳児に対して、きょうだいの下の子どもよりは上の子どもに対して、そしてより自立した食事の食べ手に対して多くみられた。これは、言語能力がある程度獲得されてくると、母親は正規の会話の相手として子どもをみなすようになり、従って、代弁が少なくなり、情報提示が多くなると解釈される。

【子どもの発話について】

結果は、TABLE 8 の通りである。1歳児の発話頻度が少ないため、年齢による比較・きょうだい間の比較・習得率による比較は行わず、習得段階別のデータを示し、特徴を議論するにとどめる。

母親の発話の大半が「食べる」に集中していたのに対し、子どもの発話では、「会話」が最も多くなっている(ただし、II段階を除く)。そして、その次に「食べる」「味」となる。

先の分析と合わせると、食事場面での母子のやり取りの特徴が浮き彫りにされる。母親は、「さあ、食べなさい」と摂食を促し、子どもは、目の摂食とは直接に関係のない発話をする。母親は、子どもが食べていれば、おしゃべりにつきあうが、食べていなければつきあわず、「さあ、さあ、食べなさい」と再び摂食を促す。そこでの母親の課題は、食べることから注意のそれがちな子どもの関心を、いかにしてうまく(友好的な雰囲気を見失わずに)食事へと向けさせるかにある。

TABLE 8 子どもの発話内容
習得率による分類

	食べる	道具	マナー	けじめ	味	会話	その他	合計
I段階 (N=7)	0.7 15.9	0.0 0.0	0.7 15.9	0.0 0.0	1.3 29.5	1.4 31.8	0.3 6.8	4.4 100.0
II段階 (N=4)	7.8 30.5	0.0 0.0	0.3 1.2	3.3 12.7	10.2 39.8	3.8 14.8	0.3 1.0	25.6 100.0
III段階 (N=5)	8.8 21.4	1.0 2.4	1.6 3.9	4.0 9.7	4.8 11.7	20.6 50.0	0.4 1.0	41.2 100.0
IV段階 (N=8)	17.4 24.4	2.6 3.7	7.1 10.0	4.0 5.6	13.9 19.5	25.5 35.8	0.7 1.0	71.2 100.0

上欄は実数 下欄は百分率

例えば、U児の食事場面では、C「こんちゃんがね、こんちゃんがね」→M「こんちゃんのコーンちゃんですよ（とうもろこしを食べさせようとしている）」→C「こんちゃんの？」→M「さあ、こんちゃんのコーンちゃん、おいしいかな？」というやり取りがみられた。また、B児の兄と母親との間には、C「仮面ライダー！（食べずに遊んでいる）」→M「ほら、これ、食べると、仮面ライダーみたいになれるよ」というやり取りが観察された。いずれの母親も、摂食を促す中に、子どものおしゃべりをうまく組み入れ、子どもの注意を食事へと引き付けようとしていることがわかる。

(2) 子どもの生理状態による発話

—母親の発話と子どもの食行動との関連—

母親の発話と子どもの食行動との関連を分析する。全ての母親の発話を、その5秒前に子どもがそしゃく行動を行っているか（食べている）、否か（食べていない）で分類する。母親の発話内容と形式について、どのような違いがみられるかを明らかにする。結果は、TABLE 9の通りである。発話内容カテゴリー「会話」については、更に、新しく話題を導入した者が、母親か子どもかをチェックし、食べているときと食べていないときのやり取りの違いを浮き彫りにする。

<発話内容>

(a) 食べている・食べていない

「味」(t=3.60, p<0.005: 食べている>食べていない)と、「道具」(t=6.33, p<0.0001: 食べている>食べていない), 「けじめ」(t=5.06, p<0.0001: 食べていない>食べている)について有意な差が認められた。

TABLE 9 母親の発話内容と発話形式
食べているときと食べていないときの比較
(N=24)

	促し	質問	情報	賞賛	禁止	母親	代弁	その他	合計
食べる	10.7	3.2	1.3	1.7	0.3	0.7	0.0	0.0	17.8
	21.6	6.5	2.5	3.4	0.6	1.4	0.0	0.1	36.0
	8.3	3.7	0.5	0.4	0.0	0.7	0.1	0.2	13.9
	25.6	11.5	1.5	1.3	0.1	2.2	0.2	0.5	42.9
道具	3.6	0.7	0.7	1.3	0.6	0.2	0.1	0.0	7.1
	7.2	1.3	1.3	2.6	1.2	0.4	0.3	0.0	14.4
	0.3	0.1	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.8
	0.8	0.2	0.1	0.5	0.7	0.1	0.0	0.1	2.5
マナー	0.4	1.6	1.9	0.0	0.1	0.1	1.2	0.0	5.4
	0.8	3.3	3.9	0.0	0.3	0.3	2.4	0.0	10.9
	0.1	0.7	1.5	0.0	0.0	0.5	0.4	0.0	3.2
	0.3	2.1	4.6	0.0	0.0	1.6	1.4	0.0	10.0
けじめ	0.4	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	1.4
	0.7	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	2.8
	2.0	0.4	0.8	0.5	0.5	0.2	0.1	0.1	4.7
	6.3	1.2	2.3	1.6	1.5	0.7	0.2	0.5	14.4
味	0.4	2.6	1.1	0.0	0.0	0.1	2.9	0.0	7.1
	0.9	5.2	2.2	0.0	0.0	0.2	5.8	0.0	14.4
	0.9	0.2	0.2	0.1	0.0	0.2	0.3	0.0	1.9
	2.7	0.8	0.8	0.2	0.0	0.7	0.8	0.0	5.8
会話	0.1	0.7	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.7
	0.1	1.5	11.9	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	13.5
	0.0	1.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3
	0.0	3.1	10.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.3
その他	0.0	0.0	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	4.0
	0.0	0.0	5.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	8.0
	0.0	0.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	3.6
	0.0	0.0	10.1	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	11.1
合計	15.5	9.0	13.7	3.2	1.2	1.3	4.3	1.3	49.5
	31.4	18.2	27.7	6.4	2.5	2.6	8.6	2.7	100.0
	11.6	6.1	9.6	1.2	0.8	1.7	0.9	0.7	32.5
	35.7	18.9	29.6	3.6	2.3	5.2	2.6	2.0	100.0

点線より上部分は食べているとき、下部分は食べていないとき、その各々について、上欄は実数、下欄は百分率

** p<0.01 * p<0.05 + p<0.10

「おいしいね」とか「これ、しょっぱいかな?」といった「味」に関する情報、「おはし使ってみたら?」といった「道具」に関する情報は、食べるという食事の基本的目標が満足されている時に十分に与えられる。食べて栄養を摂取するという食事の生理的機能が何よりも重視され、それが満足されると、味を楽しんだり、文化的に認められた方法で食べる等、いわばより文化的色彩の強い事項へと注意が向けられるようになる。

では、子どもが食べていないときはどうなるか。食べないことは、「ごちそうさま?」「もう、おしまい?」といった母親の発話(「けじめ」)によって、いわば、食事という時間的空間的枠組みの外に排除される。母親による「けじめ」の発話は、「食べる→食欲の満足」という生理的行為としての「食べる」と、「いただきます→ごちそうさま」までの食事の手続とを関連させる働きをしている。すなわち、母親は、子どもの生理的状态と活動の手続(スクリプト)とを対応させている。このような働きかけを受けながら、幼児の食事は、生理的行為としての「食べる」から、「食事」という文化的あるいは社会的手続へと変換されていくのだろう。食べているときよりも食べていない時に、「けじめ」の発話が多く為されていることが示されたことによって、母親は生理的行為としての「食べる」から、食事スクリプトへの変換を手助けしている。問題3への示唆が得られた。

(b) 新しく話題を導入すること

結果は、TABLE 10 に示す。食べている・いない(2)×話題の導入者(2)の分散分析を行ったところ、導入者の主効果($F(1,5)=26.40, p<0.005$:子ども>母親)、および交互作用($F(1,5)=12.55, p<0.05$:食べているときは子ども=母親, 食べていないときは子ども>母親)が認められた。母親は、子どもが食べていないときには、自らすすんで「会話」を行おうとしない。

TABLE 10 話題の指導者

食べているときの食べていないときの比較
(N=9)

	母 親	子 ども
食べている	6.9	6.9
	50.0	50.0

食べていない	2.9	14.5
	16.6	83.4

上欄は実数 下欄は百分率

<発話形式>

結果は、TABLE 9 の通りである。「質問」($t=2.06, p<0.05$:食べている>食べていない)と「賞賛」($t=2.06, p<0.05$:食べている>食べていない)について、有意な差が認められた。母親は、子どもが食べていないときには、質問をして、子どもに発話のチャンスを与えようとししない。母親は、子どもの注意を摂食それ自体へと引き付けたいため、よけいな発話を行わせようとししないのだろう。

これに対して、子どもが食べているときには、「質問」をして発話のチャンスを与えると共に、「賞賛」を多く行う。では、何を賞賛の対象にしているのか。TABLE 9 をみると、「食べる」こと、ついで「マナー」であることがわかる。

母親は、幼児との食事場面では、食べることそれ自体、マナーを守って食べること、つまり、文化的に認められた形をとって食べることに強く注意を引き付けられているといえる。食べるということが重視されていることは、子どもが食べているいないに関わらず、「食べる・促し」が、かなり高い割合で(食べていないとき:25.6%, 食べているとき:21.6%)観察されたことから示唆される。母親は、食べていないときにはもちろんのこと、食べている時でさえ、「たくさん食べてえらいね!」と誉める傍らで、「もっと食べてね!」と、更に、子どもの注意を摂食へ向けようとするのである。

幼児と母親との食事場面では、食べることに重きがおかれ、これが達成されているか否かによって、食事場面での母親の働きかけは、大きく制約されている。問題2は支持された。

(3) 母親の発話と子どもの発話の意味的随伴性

子どもの発話が、意味的に、母親の発話に随伴するか否かを問題にし、継時分析を行う。

<継時分析の方法>

Bakeman and Gottman (1986) による。周辺度数を利用して期待値を算出し、それと観測値とのずれを問題にする。期待値は、母親の発話→子どもの発話への推移がランダムであるという仮定によって算出される。観測値と期待値のずれが有意に大きければ、この推移はランダムでないことを示す。すなわち、母親の発話から子どもの発話へ、何らかの連関があると考えてよい。

Z得点の算出方法は、以下のものである。観測値から期待値を減じた値を、期待値と観測値の差に関する推定された標準偏差で除すことによって求められる。Z得点が、絶対値で1.96以上であれば、 $p<0.05$ とみなされる。グループ間の比較に用いる場合は、グループ

間のZ得点の平均値の差が、1.96以上であることが有意の目安になる。

本研究の資料では、子どもの発話頻度が少ないため、2回の観察値を合計し、その値を各被観察児のデータに当てる。1回のみのお観察に留まったU児については、1回分の資料を用いる。

本分析において随伴性が高いことは、次のことを意味する。すなわち、子どもは母親の発話をそのまま繰り返す傾向が高い。逆に随伴性が低いことは、子どもが、直前に母親の発話なしに、独立した話し手として発話していることを意味する。

子どもがなんらかの発話を行ったとき、その5秒前に母親がどのような内容の発話をしているかをチェックする。分析の単位は意味であり、例えば、M「おいしいから、食べてね」→C「食べる」という発話の流れがあった場合、母親の発話は「おいしい」ということ

と「食べる」ということの2つの意味を表現しているため、その各々について、即ち、「M：食べる→C：食べる」と「M：おいしい→C：食べる」の二項目についてチェックする。

<結果>

TABLE 11に示す。「けじめ」について、II段階とIII段階の間に有意な差が認められた($z=2.61$)。習得率がII段階からIII段階へと移行するのに伴って、「けじめ」発話の随伴性が高まる。「味」について、やはり習得率II段階とIII段階の間に有意な差が認められ($z=2.78$)、「けじめ」と同様、II段階からIII段階に移行するのに伴って、随伴性が高まる。「味」については、更に、III段階とIV段階の間に有意な差が認められ($z=-2.57$)、今度は逆に、習得率が高いIV段階の方が、随伴性が低くなっている。III段階の子どもは、他の習得段階にある子どもに比べて、発話の随伴性が高いといえる。

TABLE 11 母親の発話と子どもの発話の意味的随伴性

	摂食	食欲	道具	そしゃく	姿勢	食べ方	こぼす	けじめ	味覚	食品	共食	会話
I段階 (N=7)	5.00											5.00
	0.51											0.18
	0.56											-0.18
II段階 (N=4)	5.70	4.70						4.30	4.00	8.30		14.00
	1.02	0.07						2.88	2.71	2.96		0.01
	0.98 0.87							* 2.61	* 2.78	-0.41		-0.12
III段階 (N=5)	11.00	5.80	2.50		2.00		2.00	6.50	4.80	6.00		20.00
	2.04	0.94	4.15		8.01		-0.52	5.49	5.49	2.55		-0.11
	0.16 -0.93		0.69		1.59		0.66	0.77	* -2.58	0.12		0.55
IV段階 (N=8)	14.00	2.30	3.20	4.20	2.00		4.00	4.30	7.60	7.80	1.80	30.00
	2.19	0.01	4.85	2.85	9.60		2.51	6.26	2.92	2.68	-0.61	0.44

上欄は観測値 下欄はZ得点 * $p<0.05$

□内はZ得点の段階間の差

「味」については、先に、母親の発話を習得率と比較した分析において、次のことが示されている。すなわち、母親は、II段階の子どもに対して、最も多く、「味覚」に関する発話をする。ついで、III段階、I段階、IV段階と続く。これと本分析の結果をあわせて考えると、習得率II段階では、母親は「味覚」に関する話題を取り上げ、情報を与える。III段階になると、母親も話題に取り上げる一方、子どもの方は、それに随伴する形で「味覚」を発話するようになる。IV段階に

なると、母親の方では、以前ほど「味覚」を話題に取り上げなくなる。ところが、子どもの方では、母親の発話に随伴しない形で発話を行う。

まず、母親から子どもへと「味覚」に関する情報が、積極的に与えられる時期がある。これが習得率II段階である。ついで、子どもがそれにならって「味覚」を発話する時期がくる。これは、いわば、学習の時期といえ、それが習得率III段階にあたる。最後に、習得率IV段階になると、母親から子どもへ与えられる情

報は減り、それでも、子どもは自立的に(随伴的でなく)「味覚」を発話する。

このような過程を経て、子どもは、「おいしい」「甘い」「しょっぱい」を食事中に発話することを学んでいくのだろう。Q児の第1回観察において、C「まぜーい」→M「おいしいでしょ!お・い・し・い・って、いってごらん」というやり取りが行われていた。おいしいということは、単なる生理的事実を超えて、「おいしくなければならない」という文化的意味によるものであることがわかる。食事中に「おいしい」と発話することは、文化的意味の実践を意味するともいえる。そして、そこに至る過程には、まず、周囲にいる文化に熟知した指導的他者(母親)による情報の提供→子どもが母親の発話を繰り返す→自立的に発話する、という段階を経る。問題4にある文化的学習過程への示唆が得られた。

結 論

食事場面での母親の発話に制約を与える要因として、子どもの年齢および基本的食事習慣の習得程度と子どもの生理的状态に焦点を当てた。その結果、子どもの年齢が高いほど、そして習得程度が高いほど、母親は目の前の摂食から離れた話題を多く取り上げることが示された。年齢が上がるにつれて、幼児と母親との食事場面は、食べて食物を摂取するという生理的意味あいの強い場から、コミュニケーションを行い、会話を楽しみながら楽しく食事するという文化的あるいは社会的意味あいの強い場へと変化していくといえる。また、子どもの生理的状态との関連については、子どもが食べているときには、味覚や道具に関する発話が多く、食べることでそれ自体のみならず、より文化的色彩の強い事項へと話題が及ぶことが浮き彫りにされた。更に、食べているときには食べていないときよりも、賞賛や質問形式の発話が多くみられた。子どもが食べていれば、母親は質問をして子どもに発話のチャンスを与え、食べるだけの食事ではなく、コミュニケーションをはかる食事を実践しようとする。とはいっても、幼児との食事場面では、食べることでそれ自体が何よりも重視されており、それは、子どもが食べているいないに関わらず、「さあ、食べて!」という発話が、食べていないときには全体のおよそ1/4、食べているときでさえおよそ1/5観察されたことから伺えた。

食事スキプットの獲得過程への示唆については、子どもが食べていないときに、母親による「はじめ

(食事の開始と終了を言及する)発話が、食べているときよりも多くみられることから、母親は、子どもの生理的欲求の満足と、文化的あるいは社会的手続としての食事の終了とを対応させているのではないかと考察した。こうした働きかけが、子どもによるスキプットの獲得を援助しているのではないだろうか。

最後に、子どもの発話と母親の発話の意味的随伴性を分析した結果、「味覚」カテゴリーについて、次のようなことが示唆された。即ち、発達の初期の時点(本研究では習得率II段階)では、母親による発話があり、ついで、子どもによるその模倣時期(習得率III段階)がある。模倣時期を過ぎると、子どもは、母親による発話の先行なしに、自立的に発話ようになる。文化的に習熟した指導的他者(母親)による情報の提示があり、その後、それを模倣という形で直接に学習する段階がある。ついに、子どもは、自ら、自立的に文化的意味の実践者として振舞うようになる。この分析から、文化的意味の伝達は、こうした過程を経て行われるのだろうという示唆を得ることができた。

最後に、本研究は、先にも述べたとおり、被観察児の統制が不十分であることに加え、東京近郊に在住する中流家庭の母子という限られたサンプルである。また、食事場面での母親の行動は、各母親の持つつけ観(特に、食事習慣に関するもの)、食事をどの様な場として持ちたいかといった信念等に、影響を受けている可能性もある。母親の実際の行動が、母親の持つ信念とどの程度関連するのかという問題は、近年の発達研究の課題の1つであり(Goodnow, 1987; Miller, 1987)、この点に対する示唆を得るためにも、被観察児の数を増やし、母親の信念を統制の一変数として加えた研究をする必要がある。更に、今回の分析では取り上げることでできなかった母親の非言語的反応についての分析、子どもの食べ物に対する嗜好、観察時の献立、空腹状態などの生理的変数をも加え、それらが、そこでのやり取りにどの様な影響を与えているかを調べることも、今後の課題の1つである。

付 記

資料の収集および転記にあたりまして、浜井千夏さん、坂田理恵さんに御協力いただきました。記して感謝致します。

引用文献

天野幸子 1986 食事場面における母子関係の研究
女子栄養大学紀要, 17, 167-178.

- 天野幸子 1987 食事場面における母子関係の研究
(2) 女子栄養大学紀要, 18, 273-281.
- Bakeman, R. and Gottman, J. 1986 *Observing interaction : an introduction to sequential analysis*. Cambridge University Press.
- Birch, L.L. 1987 Children's food preferences : developmental patterns and enviromental influences. In Vacta, R. (Ed.) *Annals of Child Development*. Vol. 4. JAI Press.
- Birch, L.L., Zimmerman, S.I. & Hind, H. 1980 The influence of social affective context on the formation of children's food preference. *Child Development*, 51, 856-861.
- Brumberg, J.J. 1988 *Fasting girls : the emergence of anorexia nervosa as a modern disease*. Harvard University Press.
- Goodnow, J.J. 1988 Parents' ideas, actions, and feelings : models and methods from developmental psychology, *Child Development*, 59, 286-320.
- Miller, S.A. 1988 Parents' beliefs about children's cognitive development. *Child Development*, 59, 259-285.
- 水野清子・染谷理恵・根岸由紀子・山本初子・金沢治子・武藤静子・神田久男 1988 思春期における栄養・食生活・摂食異常の現状と対策に関する研究—健康と食生活に関する加齢的变化—, 日本総合愛育研究所紀要, 24, 47-64.
- 村山貞雄 1988 幼児のしつけの国際比較に関する基礎調査 多賀出版
- Nelson, K. 1986 Event knowledge and cognitive development. In Nelson, K. (Ed.) *Event Knowledge*. LEA.
- Nelson, K. and Gruendel, J. 1986 Children's Scripts. In Nelson, K. (Ed.) *Event Knowledge*. LEA.
- Valsiner, J. 1987 *Culture and the Development of Children's Action*. John Wiley & Sons Ltd.
- Valsiner, J. 1989 How can developmental psychology become "culture-inclusive"? In Valsiner, J. (Ed.) *Child Development in Cultural Context*. Hogrefe and Huber Publishers.
- Wertch, J.V. 1980 The concept of activity in soviet psychology : an introduction. In Wertch, J.V. (Ed.) *The Concept of Activity in Soviet Psychology*. Sharpe.

(1989年8月21日受稿)